

出題分析			
試験時間	90 分	配点 150 点	大問数 2 題
分量 (昨年比較)	[減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]	
<p><b>【概評】</b></p> <p>大問数は昨年から 1 題減少した。自由英作文は独立した大問ではなく、長文読解の中に組み込まれた。その他設問の出題形式に関して大きな変更点はなく、英語の語彙・文法知識、読解力、記述力を総合的に問うている。例年通り英文は読みやすいが、制限時間に対して分量が多い。記述問題の解答に時間を費やしすぎないように気を付けたい。大問 I・II は解答の判断に迷う設問が少なく、また大問 II に付随する自由英作文も取り組みやすかった。したがって、昨年と比較し難易度は同程度と言えるだろう。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	長文読解問題 「都市における人間と動物の共生」	英文の長さは昨年と同程度だった。設問数は記述問題 9 問、記号問題 6 問の計 15 問であった。今年では新たな出題形式として、文中の英文をパラフレーズする問題が出題された。記述問題においては平易な出題が多く、時間内にいかに迅速にまとめられるかが重要である。	標準
II	長文読解問題 「「忙しさ」を感じることの悪影響」	昨年と同様に、設問文は英文である。設問数は昨年より増加し記述問題 6 問、空欄補充問題等 10 問、自由英作文 1 問の計 17 問であった。問 13 や問 16 の内容説明問題は解答根拠が明確で、簡潔明瞭な英語で表現できたかがポイント。全体的に取り組みやすいが、問 11 の語形変化を含めた動詞の空欄補充でケアレスミスがないよう確実に押さえておきたい。自由英作文は例年通り、与えられたテーマについて述べる問題で、語数は昨年の 100 語から 80 語に減少した。今年、「忙しさを感じたときの対処法」についてであった。テーマは本文に関連した身近なもので、比較的自由に書ける問題であったと思われる。	標準

合格のための学習法

出題形式には例年若干の変動があるが、記述主体の長文読解問題と自由英作文が中心となっていることに変わりはない。読解問題では、語彙力の養成に努めつつ、文章を正確に読める内容把握力と、理解した内容を記述答案に落とし込むことができるだけの日本語の表現力を身につけることが第一だろう。そのため、問題演習では、必ず自分で答案を作成することが大切である。第二に、英作文ではどのようなテーマが出されても、臨機応変に論理的な英文が書けるだけの表現力、発想力をつけることが大切である。賛成・反対意見を述べるもの、個人的な経験について記述するものなど、様々なテーマについて 100 語程度の英文を書く練習を積もう。